４．参考（概要図）

肝炎研究７カ年戦略（平成20～26年度）

肝炎等の研究成果

・B型肝炎：
インターフェロン治療
逆転写酵素阻害薬治療
・C型肝炎：
インターフェロン治療
ペグインターフェロンとリバビリン併用療法
・肝硬変：
代償性肝硬変のインターフェロン治療
・肝癌：
ラジオ波焼灼、抗がん剤、手術、等の治療法
・基礎：
肝炎ウイルス感染細胞、キメラマウスなど確立
・疫学：
肝炎患者の推計の基、母子感染予防、等

新規重点課題（平成20年度時点）

・B型肝炎：
逆転写酵素阻害剤に対する耐性ウイルスの機序解明
新規逆転写酵素阻害剤等の治療薬開発
・C型肝炎：
次世代的なインターフェロン治療法開発による根治率の改善
インターフェロン副作用の少ない治療法・治療薬開発
・肝硬変：
肝臓の線維化機序の解明から治療法開発
ヒトiPS細胞等の再生医療を利用した根治治療の開発
・肝癌：
診断マーカーや最新の画像機器を用いた超早期発見技術の開発
新規抗がん剤の開発、集学的治療等新規治療法の開発
・基礎：
肝炎ウイルス感染後の病態進行過程の解明
肝炎ウイルスの薬剤耐性変異にかかわる過程の解明
肝炎ウイルスによる発がん機構の解明
・疫学：
全国規模の肝炎感染者の実態解明
検診・予防・医療体制等の評価

戦略目標

この研究結果から、
今後7年間で、
・B型肝炎の臨床的治癒率、約30%→40%、
・C型肝炎（1b高ウイルス型）の根治率 約50%→70%
・非代償性肝硬変（Child-Pugh C）における5生率 約25%→50%（B型）、約25%→35%（C型）
・進行肝がんの5生率 約25%→40%
を目指す。

研究費の重点化、国立感染症研究所の体制整備、人材育成、国際交流

新型インフルエンザ等新興再興感染症研究

1. 新型インフルエンザへの対応に関する研究

新型インフルエンザ対策に関する研究を推進させるため、基礎的研究のみならずワクチン実用化のための治験支援を含め、その開発へ強力な支援を行う。また、我が国の施策の基礎となる公衆衛生的介入に資する研究、各種施策介入のシミュレーションモデルの開発等の疫学研究及び社会学的研究等を行う。

2. 感染症の新たな脅威への対応及び感染症対策の再構築に関する研究

新たな脅威となる感染症に関する研究及び対応、さらに世界情勢の変化の中で警戒の必要性が高まっているバイオテロに対し、迅速に対応するための迅速診断法やワクチン開発等の研究を行う。また、伝染病予防法及び他の個別疾患対策法を廃止、統合し、新しい感染症法が施行されてから10年目の節目として、2012年排除を目指している麻疹（はしか）、未だ蔓延国と定義される結核等に関する、感染症対策の点検及び再構築をするための研究等を行う。

3. 国際的な感染症ネットワークを活用した対策に関する研究

不十分な医療資源下で発生しやすく治療が極めて困難な多剤耐性結核菌、地球温暖化に伴い北進を続けるデング熱、ウエストナイル等の節足動物媒介感染症、旅行者下痢症として問題になっている耐性菌腸チフス等下痢症等、周辺諸国における発生動向の正確な把握やコントロールが、我が国自体を新たな感染症から守る重要な対策であることを鑑み、アジア諸国を中心に感染症の状況の把握、相手国の質の向上に資する研究を行う。また、治療薬等に対する営利企業の投資が少ない途上国に多く見られ先進国に少ない疾患であるいわゆる”顧みられない病気(Neglected Disease)“に対する研究を実施する。このような取り組みを通じて、アジア、ASEAN各国のネットワークによる、新型インフルエンザ対策を含めた感染症対策の総合的な防護体制を構築する。

4. 感染症対策にかかる基盤整備

迅速な対応の基盤となる感染症の発生動向に関し、新たなサーベランスの検討、コンピューターを活用したシミュレーションモデルの検討、リスクコミュニケーションのあり方、バイオセーフティ・バイオセキュリティの最新の知見の規制への反映等、個別の疾病ではなく、感染症全体の基盤整備となる研究を行う。